

猿田佐世 「再処理をめぐる日米関係」(要約)



私は、今の政府の立場とは違う立場で日米の橋渡しをする「新外交イニチアティブ」の代表をしています。原発・再処理の関連でいえば、日本の国会議員をワシントンに案内し、米側のしかるべき人たちとつないで、「原発はいりません」「再処理はやめましょう」という声を伝える仕事をしてきました。ワシントンに住んでいる中で、日米外交があまりに限られた人たちでされているのを目の当たりにしたのがこの活動を始めたきっかけです。

3.11の大震災・原発事故以降、日本では徐々に反原発運動が盛り上がるわけですが、アメリカでは何人かの「専門家」と言われる人たちが4月上旬には「原発を早く元に戻して再稼働すべし」ということを言い始めました。

日本では、当時の民主党政権が反原発の市民の声に押される形で「2030年代にはゼロに」の閣議決定「案」が出てきました。ただ、青森県との関係上再処理は続けようという内容でした。以後、日本の新聞が「ワシントンの声」として「日本の脱原発決定に猛烈に反対」という記事を次々に出しました。こうした「アメリカ人の声」はワシントンの「日本担当者(知日派)」と呼ばれる非常に少人数のコミュニティからのもので、これが当初の閣議決定をうやむやにしたということに強い違和感を覚えました。私は日本の国会議員さんたちと米政府・議員とが意見交換をする場を設けてきて、日本の原発ゼロに文句を言う政治家・役人にまず会ったことがありません。むしろ、国務省の役人からも国防総省の役人からも、「日本の原発の立場は問わないが、使用済燃料の再処理はやめてほしい」ということを言われてきました。しかしそうした声はニュースにならなかった。

米国では、原発に賛成する人でも、再処理については安全保障・核不拡散の観点から反対する人が非常に多いです。プルトニウム(Pu)を蓄積することで日本は潜在的に核兵器を持っている国だ、という評価になるわけです。しかし日本ではひとえに「エネルギーの問題」としてしか考えられておらず、「エネルギーに必要なら使うしかない」となってしまう。安全保障の観点が抜けているわけです。

米国内で日本のことについて発言する人たちを、(1) 原発の企業・研究者などの関係者、(2) 知日派と呼ばれるご意見番、(3) 核不拡散に熱心に取り組んでいる人たち、の3つに分けることができます。

(1) の中でも再処理を強く(公式に)推進する人

は少ない。(2)の人たちですら、再処理を推進する人は多くない。が、原発は推進。(3)はカントリーマンさんのように再処理に一生懸命反対している人たちです。(2)の人たちの声は日本政府にとっても大変便利なので、ここにお金をつぎ込みインセンティブを与えて「アメリカの声」として拡声して日本に届けるという仕組みがあります。

再処理を巡って原子力協定はどう議論されてきたのか? 「全ての国が再処理から撤退してくれれば非常に嬉しい」と主張していたオバマ政権から、2017年1月トランプ政権に代わりました。トランプは日本に対しても厳しいことは言わないのではないかと思われていましたが、実際に政権に近い人の話を聞くと、「核不拡散は米国の国是で超党派で支持されている。政権が変わっても日本のPu蓄積を許すようになるわけではない」というものでした。

日本側は、再処理機構を設立して政府が強く関与することで「使用目的のないPuは持たない」体制を作ったと米側に納得してもらおうとしました。しかし米側はPu保有量の削減方針をもっとクリアにしてほしいと日本政府に要請していたわけです。ただ、米政府内で核不拡散・Pu問題に一生懸命取り組んでいる人がいても、日本の側にその声を受け止める受け皿ができていない。なので私は外務委員会メンバーと面談を重ねたり、もっと聞かれてしかるべき声を拡散するためにシンポジウムを開催したりしてきました。特に、また韓国やサウジアラビアなど米国に非常に近い国々が、「日本と同等の再処理権限をわが国にも認めろ」と主張するようになり、米側は頭を悩ませている。米上院議会でも、「日米原子力協定は再交渉されるべきではないか」「日本の再処理維持はこの地域における核拡散の危険性を増加させるのではないか」という質問が出されています。

昨年6月10日、「米がプルトニウム削減要求」という記事が日経新聞の一面トップに載りました。これまでのロビー活動の成果がここに出ているわけです。原子力協定は自動延長になりましたが、Puについては日本に圧力をかけ続けていたわけです。それを受け、日本の第5次エネルギー基本計画や原子力委の「我が国におけるプルトニウム利用の基本的な考え方」でPu削減が打ち出されました。しかし課題もあります。「削減」と言いながら再処理すれば増えるわけで、本当にどうやって減らすのか、どういう処分方法をどんな期間で実施していくつもりなのかを解明していく必要があると思います。

(要約・編集: 宮崎)